退職記念最終講義

国語教育と平和教育の接点

伊藤　隆司[i]

はじめに

コロナ禍のために退職記念最終講義を行うことができませんでした。本稿は，予定していた内容を平易な文章に書き起こしたものです。立命館大学での研究を振り返りながら，国語教育の持つ意味や可能性について，とりわけ平和教育の観点から論じてみたいと思います。

忘れてはならない戦争の記憶

戦後75年以上が過ぎて，残っているはずの戦争の痕跡は，ますます見つけにくくなってきました。教師も子どもも直接的な体験を持たない世代となり，戦争の伝承が危ぶまれています。

戦時中，日本の「本土」に爆撃機が飛び交うようになると，防空・防火が義務化され，自宅や公園や広場などのあちこちに防空壕（待避壕）が掘られました。焼夷弾による火災や爆弾の破片などから身を守るための防空頭巾は必需品となり，街角で行われていた防火訓練は，やがて学校へと移り，国民学校の校庭でも頻繁に行われました。1945年３月10日に東京を襲った大空襲では，100万人を超える人々が焼け出され，死者･行方不明者10万人以上とも言われています。

また，「京都に空襲はなかった」と言う人がいますが，調査が進むにつれて，それが間違いであることがわかってきました。1945年１月16日，東山区馬町付近に250ポンド爆弾20発が投下され，その後も京都市内では，３月19日に西院付近に２発，４月16日に太秦に10発，６月26日には上京区西陣に７発が投下されています[1)]。

サイパン島陥落によりB29爆撃機による空襲が不可避になった1944年９月以降になると，全国の主要都市で建物の強制疎開が急速に進められました。現在，道幅50メートルの大幹線道路として京都市の交通に重要な役割を果たしている五条通・御池通・堀川通などが強制疎開のなごりであることは周知の通りです。

教科書から消える「戦争児童文学」

学校では，「戦争児童文学」として，「おこりじぞう」「ガラスのうさぎ」「すみれ島」「おかあさんの木」「チロヌップのきつね」「マヤの一生」「火垂るの墓」「太陽の子」「猫は生きている」「あるハンノキの話」「ひろしまのエノキ」「石うすの歌」等々が紹介されてきました。また，小・中学校の教科書には，「ちいちゃんのかげ

i　立命館大学産業社会学部教授

おくり」「一つの花」「川とノリオ」「大人になれなかった弟たちに……」「黒い雨」などが掲載され，かつては各学年に必ずひとつは載っていた時期があったほどです。

ところが，その数は次第に減り，今では小学校６年間のうちに３作品しか載っていない教科書すらあるのです。

「平和教材」の果たす役割

多様な内実を持つ文学作品を，題材でひとくくりにして，「戦争児童文学」とか「平和教材」という名称で呼ぶのは乱暴です。しかし，あえてその名称が使われてきたのは，教育実践の現場において，戦争の問題に文学を通じて迫ることへの特別な思い入れがあったからに違いありません。

「戦争児童文学」では，戦争という「大状況」では語り尽くせない，「個」にまつわるエピソードが展開されます。描かれているのは，その人物にとっての戦争です。だから，どれひとつとして同じものはありません。固有の名前を持ち，夢や希望を抱いていた人物たちの魂の声が聞こえてきたとき，それぞれの人物は，かけがえのない「個」として読者の脳裏に浮かびます。もはや，「戦争で死んでいった人たち」という言葉でひとくくりにすることはできません。

また，叙述されているのは，できごとの「いきさつ」だけではありません。登場人物の心の内（思いや願い）はもとより，背景に広がる「社会」の状況も描かれます。そして，さらには，ある事態に至った「理由（わけ）」や，そのことが持つ「意味」をも読者に問いかけるのです。

国際平和ミュージアムと無言館

立命館大学は，1992年に国際平和ミュージアムを設立しました。そこには，煤けた「防空頭巾」，使い込まれた「雑のう」や水筒，思いのこもった「千人針」など，戦争や紛争，人間と平和に関わる約４万点の品々が保管・展示されています。また，2005年には，ミュージアムの２階に「無言館／京都館」が開設されました。長野県上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」の別館であり，画学生たちが遺した絵画やスケッチブックや絵筆などが収蔵されています[2)]。

それらの遺物は，それ自体が「歴史の生き証人」として，ストレートな存在感（リアリティー）を持っています。たとえば，広島で被爆した木村愛子さんがその日に着ていたワンピースは，上半分が黒く焼け焦げています。実物を見るだけで，たちまち「痛み」や「恐怖」が実感としてこみ上げてきます。

とはいえ，もとより，そうした遺物自体は「無言」です。いわゆる「沈黙史料」です。そこから何をどれだけ感じとることができるかは，見る者の力量，感性次第です。

文学と博物館の違い

一方，文学（言葉）の手法は，博物館の手法とは異質です。博物館が，現実の事物をじかに見せるという方法を採るのに対して，文学は，実物ではなく「虚構」を用いる方法によって，人々に，目に見えない世界を見させ，聞こえない声を聴かせます。読者は，その物語に心を動かされ，大切な人を失う深い悲しみや，戦争の恐怖を，まるで当事者のように「共体験」するのです。

文学と博物館，両者の手法は違ってはいますが，人間と暮らしの真実に迫ろうとする点は共通です。文学を通じて感じる力や想像力を培った子どもたちは，その「まなざし」を，現実の事物を見る際に活かすことでしょう。また，博物館で戦争の遺物を目の当たりにした子どもたちは，文学の読みを一段と深め，戦争の本質に近づきます。

「心が動くこと」と「事実をリアルに知ること」とが重なり合ったときにこそ，戦争の記憶，平和への思いは，いっそう強く心に刻まれ，自分自身のものとなるのではないでしょうか[3)]。

絵の前で「無言」になる理由と「文学の力」

無言館に展示されている戦没画学生の絵は，風景画や人物画などさまざまです。一見しただけでは，特別なものには思えません。しかし，絵に添えられている解説（言葉）を読んで，作家のプロフィールや戦死の事情などを知った途端にさまざまな思いがこみあげます。

この絵を描いた画学生は，どんな願いを持って戦争の時代を生きていたのか。なぜ，どのように，亡くなったのか。解説（言葉）を手がかりとして，作家の人物像が明確になればなるほど，絵との対話が進みます。そして対話はいつしか自分自身に向かいます。日々の暮らしに安穏としているうちに，なにか大切なことを忘れてしまってはいないか。自分はこの画学生ほどの情熱をもって生きてきたのか。そんな思いが胸に溢れたとき，おもわず「無言」になるのです。

無言館の絵に添えられた解説（言葉）は人の心を揺さぶります。ましてや文学は，「言葉の芸術」（文芸）です。文学の吟味された言葉には，読者の感性や想像力に働きかけ，実体験にも劣らない衝撃をもたらす要素がたっぷりと含まれています。それこそが「文学の力」です。

そうした「文学の力」を，学校教育においてどのように活かしていくのか，それが大きな問題です。

「ちいちゃんのかげおくり」

たとえば，光村図書の教科書（３年下）には，あまんきみこの「ちいちゃんのかげおくり」が載っています。それは，ちいちゃんという幼い子をめぐる戦争と死の物語です。

この物語は，父親が出征する前の日に家族４人で先祖の墓参りをするシーンから始まります。そこでちいちゃんが教えてもらったのが「かげおくり」です。

足下のかげを見つめた目を空に動かすと，手をつないだ４人の「かげぼうし」が，すうっと空に昇っていきます。「すごうい。」「すごうい。」「今日の記念写真だなあ。」「大きな記念写真だこと。」４人の声が重なります。それが家族みんなの，最初で最後のかげおくりとなりました。

父親が出征したあと，戦争は，ちいちゃんの日常から「平穏」や「楽しさ」を奪います。焼夷弾や爆弾を積んだ飛行機が飛んでくるようになると，かげおくりをして遊んだ「楽しい空」は，「とてもこわい場所」になりました。そしてとうとう，戦争は，ちいちゃんたちの命までをも奪うのです。

日の丸の旗に送られて出征したお父さん。空襲の炎にのみこまれた母と兄。そして，こわれかかった暗い防空壕の中で，ひとりぼっちの死を迎えたちいちゃん。家族４人が，いっしょに，「空にきえて」いきました。

戦後の場面をどう読むか

ところで，この物語の本文は，そこで終わりではありません。ちいちゃんが死んで，家族４人が空に昇っていく場面（第４場面）が描かれたあとに，１行空けて，次のような文章が続きます。

それからなん十年。町には，前よりもいっぱい家がたっています。ちいちゃんが一人でかげおくりをした所は，小さな公園になっています。
青い空の下，今日も，お兄ちゃんやちいちゃんぐらいの子どもたちが，きらきらわらい声を上げて，遊んでいます。

はたして，この最後の場面（第５場面）は，どのように読まれているのでしょうか。
光村図書の教科書は,「第５場面があるのとないのとでは，どうちがうと思いますか。第４場面にある似た表現を見つけ，考えたことを，理由とともに発表しましょう。」という学習課題を提起しています。
そこで，私は，この問いかけ自体に納得できないものを感じつつ，大学の授業の折に，そのまま学生に尋ねてみました。
返ってきたのは次のような「答え」です。
「（ちいちゃんが家族といっしょに空に昇っていく第４場面と戦後の第５場面の）どちらにも『青い空の下』とか『きらきら』という表現があり，今と昔がつながっていることが分かる。」「戦中と戦後が対比されることで平和の大切さが強調されている。」「ちいちゃんが死んだ場所が公園になり，平和が戻った。」
なるほど，これらの意見は，教科書に設定された「問い」に対する「答え」としては妥当なものです。いかにも冷静で，分析的な見解です。教科書の指示通りに進められた小学校の教室でも，似たような問答が交わされるのかもしれません。しかし私は,この物語を読み終える最後の段階の教室において,こうした分析的な「問い」が立てられていること，そして，いかにもありきたりで予定調和的な問答がかわされる展開に，どうしても腑に落ちない「違和感」を感じてしまうのです。
空襲の炎の中を逃げまどい空腹と孤独のうちに死んでいったちいちゃんの最期の場面に向き合い，その死をつぶさに見とどけたはずの読者が，なぜ，いとも簡単に，その悔しさやせつなさから離れて,「一歩退いたところから語る冷静な分析者」のようになってしまえるのでしょうか。読者が感じたはずの，ちいちゃんの死に対する深い悲しみや喪失感，戦争への恐怖や憎しみは,「平和が戻った」というありきたりな言葉によって，どこかにしまい込んでしまえるほど浅いものだったのでしょうか。
提起された「問い」に対する従順な「回答者」であろうとする前に，自分自身の「心の動き」や,「まなざしの置き所」を，もう一度見直してほしいと思います。

魂のゆくえを探し続ける「語り手」

物語に付け加えられた最後の場面は，ことさらに，戦中と戦後，戦争と平和を対比させるためのものではありません。なぜなら，そこに描かれているのは「なん十年」後の町の客観的な様子ではないからです。
最後の場面は,「それから」「前より」「ちいちゃんが一人でかげおくりをした所」「今日も」「お兄ちゃんやち

いちゃんぐらいの」といった表現に示されているように，すべてが，それまでに語られてきたちいちゃんの物語の全体をあらためて想起させるように描かれています。つまりこの物語の「語り手」は，ちいちゃんをめぐる一部始終のできごとをかたときも忘れず，ちいちゃんとその家族の残像＝「魂のゆくえ」を，ずっと探し求めているのです。

この姿勢こそが，この物語の「語り手」の終始一貫した「まなざし」であり，生まれ育った旧満州でのできごとや戦争へのこだわりをもって創作活動を続けてきた作者，あまんきみこ自身の揺るがない姿勢でもあります。

あまんきみこは，物語の「あとがき」に，「雲一つない青い空をみあげると，ちいちゃんの姿がうかんできます。『かげおくり』をして，空にいったあの子。ちいちゃんのわらい声が，青い空からふってきます」[4] と記しています。

そうであるならば，物語の全体をふたたび想起させるように描かれている最後の場面は，読者に対して，「時が経つにつれて社会の様子が変わっても，あなたはちいちゃんのことをいつまでも忘れないでいますか」ということを，あらためて，問いかけているのではないでしょうか。最後の場面にかかわる教科書の設問は，このことを深く胸に刻めるようなものであってほしかったと思います[5]。

「まなざし」の据えどころ

また，子どもたちの中には，ちいちゃんが死んだ場所が戦後に「小さな公園」になっていることを知って一種の安堵感を抱く者があるようです。大学の授業でも，「公園になっていて救われた気がする」という声がありました。

登場人物が不幸にみまわれる物語を読んだ読者が，どこかに救いを求めたくなる気持ち，「ハッピーエンド願望」は，理解できないことではありません。しかし，「公園」や，子どもたちの「わらい声」は，いささかも，ちいちゃんの死に対する「救い」となるわけではありません。むしろ，ちいちゃんという「個（私）」の側に寄り添い，その死をかたときも忘れない者にとっては，公園で遊ぶ子どもたちの笑い声が響けば響くほどに，ちいちゃんのことが思い出され，ちいちゃんを喪失した悲しみが胸にこみ上げます。

主体性を持ったひとりの人間として，自分自身の「まなざし」の据えどころを，どんな時にも忘れずにいたいものです。

広島平和記念公園をめぐって

現在広島平和記念公園になっている広島市中区中島町の一帯は，かつて，映画館や商店などがひしめく広島市の中心的な繁華街でした。それを一瞬で壊滅させたのが原子爆弾（リトルボーイ）です。広島市は，焼け野原になったその土地を，平和記念公園建設という名目で，譲渡・買収・換地などの方法によって半ば強制的に取得しました。中沢啓治のマンガ『はだしのゲン』には，バラック小屋を壊され追いやられたゲンが自分の手の甲に釘を刺して，「この痛みは，忘れんぞ。このくやしい思いはぜったいに忘れんぞ。この手にきざみつけておくぞ」と語る姿が描かれています[6]。

また中沢啓治は，自伝の中で，「私たちは，原爆で素っ裸にされ，焼け跡をジプシーのようにさまよい，やっと安住の地を見つけ，必死で建てたバラックさえ奪われる口惜しさに怒りで震えた。被爆してさんざん苦しん

でいる市民を，『平和』という聞こえのいい言葉で痛めつける，旧態依然のお上の所業に，『何が平和都市建設だ！バカにするなっ！』と私は思った」[7] とも語っています。

たしかに，モニュメントの建設は，長い目で見れば「平和の礎」となるのかもしれません。しかし，その場所で暮らしていた当事者にとってみれば，戦争で平穏な暮らしを壊されたうえに，さらに土地まで奪われたわけですから，さんざんな悲しみや苦しみであったに違いありません。

この広島平和記念公園のような例を「ちいちゃんのかげおくり」の物語と重ねて読むのは強引かもしれません。しかし，「公園」という言葉を聞いた途端に，公共の福祉にかなうものとしてすぐさま受け入れ，安堵してしまう心性が私たちの心のどこかにあるとしたら，そうした発想に身をまかす前に，いま一度，自分の立ち位置を問い直してみなければなりません。「公」の名の下に「個（私）」がないがしろにされる例は，沖縄の基地問題や原発の問題に限らず，枚挙にいとまがないからです。「公」という言葉には，「個（私）」を内面から絡め取り，無意識のうちに統合してしまうような魔力があるようです。

戦後の場面に描かれていないこと

さらに，戦後の場面に関わってふれておきたいことは，そこに，ちいちゃんの家族や，ちいちゃんに繋がる人物がいっさい登場しないということです。

物語の冒頭の場面には一家そろっての墓参りのシーンが描かれていますが，最後の場面には，その家族の姿がありません。「墓参り」が，「命というものは，代々にわたって脈々と受け継がれてきたものであるということ」を象徴的に暗示したものであるなら，ちいちゃんたちがいない最後の場面は，その家族によって受け継がれてきたものが完全にとぎれてしまったことを言外に物語っていると言えそうです。

峠三吉の『原爆詩集』には，「ちちをかえせ　ははをかえせ　としよりをかえせ　こどもをかえせ　わたしをかえせ　わたしにつながる　にんげんをかえせ」[8] と記されています。戦争の本質は，そうした命の連鎖をすべて残らず断ち切ってしまうところにあるのです。

はたして，今を生きる私たちは，あまんきみこのように，「ちいちゃん」のことを忘れず，青い空からふってくるその声を聴き続けていられるでしょうか。

亡くなった人に，ふたたび生きて出会うことはかないませんが，めぐりくる年を待ちかねて，流した「燈籠」を見送り続ける人々のように，その場に残る魂に，ずっと寄り添い続けていたいものです。

注

1）　戦争遺跡に平和を学ぶ京都の会編『語りつぐ京都の戦争と平和』（つむぎ出版，2010年）211-245頁

2）　無言館については，設立者である窪島誠一郎の『「無言館」ものがたり』（講談社，1998年）『無言館はなぜつくられたのか』（かもがわ出版，2010年）などを参照のこと。

3）　2010年に学園創立110周年記念として立命館大学国際平和ミュージアムで秋期特別展が開かれた。その時に発行された記念誌『ピース★コレクション／資料でつづる平和ミュージアムの軌跡』には，子ども社会専攻所属の教員の論稿が掲載されている。角田将士「博物館を活用した社会科授業の創造」，山下芳樹「科学の英知に出逢う場としてのミュージアム」，拙論「戦争の遺物の『声なき声』を聴く」

4）　あまんきみこ『ちいちゃんのかげおくり』（あかね書房，1982年）

5）　教師や教科書が立てる「問い」は，子どもたちの読みに大きな影響を与えるため，慎重に吟味されなければならない。「分析的な問い」が読解の手がかりになることはあるが，分析に終始する「課題解決主義的読み」に陥

ることは避けたい。また，発問者が想定している一定の「答え」（「正解」）にたどり着くことを第一義的な目的とする「正解到達主義的読み」に陥ると，解釈の多様性が損なわれかねない。文学作品を読むことの楽しさは，「分析」や「答え探し」ばかりにあるのではない。文学が扱うテーマに「正解」があるとは限らない。作品に描かれた人物たちに，あるときには共感し，あるときには反発しながら作品世界に身を置くこともまた文学を読む楽しみである。課題解決主義や正解到達主義は，あまりにも理屈っぽい，視野の狭い読み方と言えよう。文学に込められているのは「問い」であり「答え」ではない。文学に出会って揺さぶられた感情や認識に，なんらかの意味づけをする主体は読者自身であるということを忘れてはならない。

6）　中沢啓治『はだしのゲン 第９巻』（汐文社，1984年）30頁

7）　中沢啓治『「ヒロシマ」の空白 中沢家始末記』（日本図書センター，1987年）147頁

8）　峠三吉『原爆詩集』（青木文庫，1952年）７頁